

曹洞宗総合研究センター公開研究会のご案内 「葬送の現在と未来—バーチャル葬儀を起点として」



近年、弔いの形は大きく変化しつつあります。こうした社会の変容に伴い、弔いは単なる儀礼を超え、「死者との関係を再構築する営み」として再評価されています。

宗教者はこの変容にいかに関与し得るのか。また、遺族は死者との関係をどのように紡ぎ直そうとするのか。本研究会では、「死」という根源的課題に対する宗教的実践と社会的課題の接点を浮き彫りにし、現代における弔いの可能性と倫理的課題について、理論・実践の両面から考察を深めます。

今回は、バーチャル葬儀を描いた映画『それはかつてあったから』（コンテクスチュアルデザイン研究室、2025年）を上映し、製作に携わられたお二人の先生をお招きしてご講演いただきます。

開催概要

日 時	2026年7月29日（水）14:00～15:50
会 場	曹洞宗檀信徒会館（東京グランドホテル）3階蘭の間
講 演	「映画制作の経緯と意図、研究意義」 瓜生大輔氏（本作プロデューサー） 「デザインフィクション映画によるバーチャル葬儀のデザイン」 有馬俊氏（本作脚本・監督）
定 員	先着60名（どなたでもご参加いただけます）
参加費	無料
申込締切	2026年7月28日（火）
申込方法	曹洞宗総合研究センターウェブサイトの申込みフォームよりお申込みください。 https://soken.sotozen-net.or.jp/



作品介绍 『それはかつてあったから』

Story

ブライダルフォトグラファーの相良真は、病で父を亡くした。しかし、葬儀を経ても父への感情をうまく整理できない。父の葬儀から2年後、友人から「友人の父の葬儀の写真撮影」を頼まれる。「新たな葬儀」に向き合おうとする中、相良は父のオンライン葬儀会場を再訪する。そこで、過去の父を知る人からのメッセージを目にし、父の過去の一面を知る。再び父を悼むために、彼はヴァーチャル会場にある父の遺影を見つめ、その人生と遺したものに思いを馳せる。

(映画『それはかつてあったから』公式ウェブサイトより引用)

プログラム

- 14:00 開会挨拶
- 14:05 映画『それはかつてあったから』
(37分)
- 14:45 休憩 (5分間)
- 14:50 講演 瓜生大輔氏／有馬俊氏
(各20分)
- 15:30 質疑応答
- 15:50 閉会挨拶



講師プロフィール



瓜生大輔氏 (本作プロデューサー)

芝浦工業大学デザイン工学部デザイン工学科准教授及びコンテクスチュアルデザイン研究室主宰。研究者、デザイナー。専門はHCI(ヒューマン・コンピューター・インタラクション)デザイン、弔い、死者祭祀・供養、故人を偲ぶためのデザイン。デジタル時代における葬送・供養のデザイン研究の世界的第一人者。



有馬俊氏 (本作脚本・監督)

慶應義塾大学サイバー文明研究センター 特任講師。研究者、映像作家。専門は映像制作、デザインフィクション、学習デザイン、リフレクションデザイン。大学在学中から映像制作活動を開始し、企業や大学の研究コンセプトビデオなどの監督を多数務める。